

常に興味深い。というのも、この問題は通常は技術的側面に注目して語られる（記録管理がきちんとなされていれば評価選別が正確かつ迅速に行われる、など）のに対して、それと同時に存在する、人類が記録を必要とするという意識面にも光をあてて理論化を試みているからである。

しかし、あらためて「記録」「記録管理」という語の定義にたちもどると、まだ少しく混乱があるように感じる。石原氏は、既存の諸定義に依拠しつつも上記の側面を取り入れて「記録管理」を再定義しているが、実際には本文中でも狭義の記録管理と石原氏の考える記録管理とが混在しているようである。結果として、はじめとおわりで新しい側面を強調しつつも、その間では従来の記録管理論の紹介にとどまっているのは残念である。

報告者の、記録と記録管理の両語の定義が互いに依拠しあっており、定義といえないのではないか、という疑問に対し、石原氏を含めた著者陣から、じつは従来の用法においても定義（ということは概念そのものも含むか）はまだ未整理である、という回答があった。こうしたことも、上記のように本章においてこれらの語のさすものが揺れている一因ではないか。今後、石原氏の提示する記録管理・史料管理の統合システム的具体像についてより議論を深めていく必要があろう。

次に第11章について述べる。ここでの目的は、評価選別システムをこれから構築すべき日本の文書館の参考として、欧米の理論を歴史的に考察することである。構成としては、欧米各国における評価選別をめぐる議論を整理・紹介したうえで、ハンス・ブームスの能動的記録評価選別論、およびそれ以後の「新しい波」にとくに注目する。安藤氏の評価によれば、ブームス理論によって、将来における価値を「予知」して評価選別するというこれまでの態度から、現代社会を分析することによって、そこで作り出される記録の評価選別に科学的客観性をもたせようと発想を転換した点において、「記録評価選別論が全く新

V

ここでは、第10章「欧米における記録管理」（石原一則）、第11章「欧米記録史料学における記録評価選別論の展開」（安藤正人）を取り上げる。しかし、合評会当日は、報告者の準備不足により十分な議論を提起できなかった。そのため、今回あらためて問題を整理した点もあることを、あらかじめおことわりしておきたい。

さて、第10章は欧米における記録管理の歴史を追いつつ、現代における記録管理の意義を探ろうとするものである。内容もこの二つの主題で二分されていると考えていいだろう。前者については歴史的経緯の報告が中心であるのでここでは省略し、後者を中心に考えたい。

石原氏は、記録を保存するというのは文化における「同一性の保持と相対化への契機」である、という視点から記録管理の意義を見出だそうとしている。すなわち、効率性のみを求め、半現用以降の視点をもたない記録管理を批判し、評価選別を経てひろく利用される社会的な存在としての史料の保存管理につながるべき記録管理を提唱している。言い換えれば、記録管理と史料管理は統合されるべきであるという考え方である。両者の統合を、上記のような視点から説明したことは非

しい段階に入った」という。

たしかに安藤氏の整理するように、ブーム理論の提示をうけて、従来のいわば価値の種類の議論に陥っているという行き詰まった状態から脱皮できそうである。しかし、この理論を実践に移そうとすると、機関の枠をこえた協同作戦や、社会学や歴史学として成立しうるほどの研究がそのために必要になることなど、非現実的な要素がかなり表出することも、明らかになっている。この、理論から実践へのシフトが現実的に可能であるか否かについて、今後も検討をしていかねばならない。

以上、第10章および11章を通じて、欧米の事例の紹介というスタンスを持ちつつも、記録管理と史料管理との関係の今後のありかたの模索、また、評価選別を考えていくには社会と記録との関係の解明をめざさねばならないという課題など、じつは現代社会においては国・地域をこえて共通に論じられる問題が提起されている。報告者は、こうした問題が、すでに「遠い外国の話」ではない状況にきていること、言いかえれば、日本は彼らと同じ土俵にあがっていることを、強く感じた。例えば、「同時代人の評価」という発想は、じつは日々の公文書の評価選別作業で無意識に実践されているようにも思う。日本での経験の蓄積が整理され、世界に向けて発信されることを期待したい。

森本祥子・国文学研究資料館史料館